第一巻

成立と影響

有精堂

萬葉集講座　第一巻
成立と影響
昭和四十八年十一月二十日発行
監修者　久松潜一
発行者　山崎誠
印刷所　株式会社文弘社
発行所　有精堂出版株式会社
東京都千代田区神田神保町一―三九
電話〇三(二九一)一五二一番
振替口座　東京四〇六八四番
郵便番号　一〇一
◇乱丁・落丁はおとりかえいたします。
3392―550811―8610

監修者のことば

万葉集の研究は、平安時代の初期からはじまり、それ以来千数百年にわたり行われている。万葉集の研究も近世までは注釈が中心をなしていたが、本文をどう訓むかという問題がいつもつきまとって古点・次点・新点がなされ、それ以後もその改訓は現在までつづいている。それだけ研究も複雑になっている。近世になると万葉集は文学的にも古今集を越えて高く評価されその研究も盛んになっている。契沖や真淵や雅澄のように万葉集研究に生涯をかけた学者も出ている。

それは近代になってからも同様である。近代から現代にかけても注釈もしくは評釈に力を注がれて居り、二十巻にわたる全注釈の完成されたものも井上通泰氏の『万葉集新考』や鴻巣盛廣氏の『万葉集全釈』をはじめ五、六を数える。そうしてピヤソン氏の万葉集英訳をはじめ外国語に翻訳されたものも数種ある。

万葉集研究は注釈・評釈のみでなく、その基礎になる本文校訂や索引も行われ、更に文学批評的研究や文学史的研究や文化史的研究その他各方面の研究がなされている。日本の代表的文学作品の中で万葉集ほど研究の諸方面に成果を挙げているのも稀れであると言ってよい。

万葉集に関する諸家の研究を集めて組織的に編纂した万葉集講座もすでに数種ある。万葉集研究の到

達した点を組織的に整理して新しく研究を進めてゆくために万葉集講座が企画されることは意義が大きい。顧みると万葉集研究は近時極めて精緻になり、細部にわたって研究が行われている。万葉集の風土の研究にしても、万葉集の動物、植物の研究にしても、それぞれ一分科をなしている。万葉の思想や万葉の美の研究にしてもそうである。万葉のすべての分野にわたってその研究を個人で行うのは不可能であるとも言える。

その上に少壮の万葉研究家も多く現れて研究家の世代の交代も自然におこっている。そういう点からも大家・中堅・少壮の研究家が一堂に集まって主要なテーマについて現在において到達した水準に立って論述し合うことは万葉研究の進歩の上にも必要である。

この『萬葉集講座』はそういう意味で企画されたものであるが、幸いに百余の研究家が協力され、その研究を寄せられたのは監修者としても喜びに堪えないとともに繚乱たる万葉花園の美しさを思わせる。もとよりこれで十分というのではなく、補うべき点は種々ある。しかし現時点における万葉研究の到達した所を組織的に展望するために役立つ所は大きい。その成果の上にたって万葉集研究が新たに開拓されることを期待するのである。

昭和四十七年十二月吉日

久松潜一

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

目次

万葉集の本質　高木市之助　一

万葉集の名義　久松潜一　一六

万葉集の成立　後藤利雄　二八

万葉集の編纂と資料　原田貞義　四五

万葉集編纂の動機と目的　古屋彰　六九
万葉集の編者　伊丹末雄　九四
万葉集の編纂年代　奈良橋善司　一二四
万葉集各巻の組織と性質〔Ⅰ〕　徳田浄　一三五
万葉集各巻の組織と性質〔Ⅱ〕　林勉　一四七
万葉集各巻の組織と性質〔Ⅲ〕　岡本準水　一六三
万葉集各巻の組織と性質〔Ⅳ〕　久松潜一　一八三
万葉集各巻の組織と性質〔Ⅴ〕　竹内金治郎　一九五
古典における万葉集の影響と享受　奥村恒哉　二〇八
近代における万葉集　山根巴　二四一

万葉集の伝本　上田英夫　二六一
万葉集の研究史　平野仁啓　二八一
万葉集研究の方法　中西進　三〇九

万葉集の本質

高木市之助

一　本質とは

まず最初に、本質という言葉から問題にしてかからなければなるまい。

㈠　本質とは当該対象に対する何よりも代表的な性格を探すことのように聞えるが、この代表的という意味を、価値的に卓抜な優秀性ということで蓋ってしまうことになると、それは必ずしも正当ではあり得ないかも知れない。なぜなら、例えば万葉集の作品の中に、或る醜悪な性質が見つかり、それが王朝の三代集はもちろん、中世や近代の作品中に容易に見つからなかったと仮定すれば、この醜悪性なるものはそのまま万葉集の通時的な本質として認めることが必ずしも不可能ではあり得ないからである。もしそうなら、更に例えば、万葉集中或秀歌のみを選んでそれをそのまま万葉の本質として認める操作が、万葉の本質それ自身へ届きかねることもあり得るであろう。

㈡　また言えば、右の代表的という言葉の意味が量的に云って高率であることによって本質という言葉につながろうとすることにも問題はなくはない。なぜなら、例えば万葉集巻八に秋相聞歌が冬相聞歌に対して凡そ三倍にもなっていることは、もちろん一つには、この巻の選者の好尚によることであって、そこに巻八の相聞歌の秋と冬の差の本質的な問題などがないこともちろんであるにしても、仮りにこの量的な格差がそうした選者の好尚を超えて万葉集における相聞歌の作品的乃至作者的本質に係る

とするならばそれはやはり問題でなくはなかろう。なぜなら本質とは必ずしも量的意味と直結して考えられるものではなく、そこに見出される何等かの性格が量的関係を超えて質的関係に触れて来て始めて考えられるものだからである。

㈢　また言えば、本質とは、或る真実であることに疑いはないにせよ、だからと言って、その真実は必ずしも通時的にいつまでも不動不変であるとは限らないであろう。このことはもはや今日、自然科学にも妥当する本質になり切っているが、況してとりわけ主体的創造的一面を担う芸術（文学を含めて）に於いての本質でなくてはなるまい。具体的に言って王朝において古今集仮名序の筆者が「人麿は赤人の上に立たむこと難く、赤人は人麿の下に立たむこと難くなむありける」と指摘している両者の縦の関連は、近世において真淵が彼等二人を一括して王朝の「たをやめぶり」を批判しつつ万葉の「ますらをぶり」を発見した両者の横の関連とでは本質論的に或るずれを認めずにはいられないであろう。つまり本質とはこのように時間を超越して不易を装っている世間に謂ゆる真理然としたしろものであるというよりも却って時間に内在して世間を動かしてやまぬ何物かであるであろう。

㈣　また言えば、本質とは、上述のように、時間に規制されるばかりか、環境という名の空間に支配されてやまぬ何ものかである。例えば人麻呂が依羅郎女に別れようとして

　　ささの葉はみ山もさやに乱れどもわれは妹思ふわかれ来ぬれば　（巻二、一三二）

と詠んだ場合この相聞歌の本質は荒々しい石見国の自然に滲透されているし、同じ彼が懐旧の思いに堪えずして

　　あふみの海夕波千鳥ながなけばこころもしのに古へ思ほゆ　（巻三、二六六）

と詠じた時この旅行歌の本質は湖畔の物静かな夕波千鳥と無関係ではあり得なかったであろう。

㈤　また言えば万葉集という文学において真に文学論的な本質とは一方に或る一つの論理に支えられなくてはならない何ものかであることは勿論であるが、同時にもっと必須なことは、その本質が単にそのように或る論理に支えられているだけの何ものかであってはならないということであろう。私は今しも本質という言葉について幾つかの問題点を列挙するための一環として論理の問題を扱っているのであって、それ以上或いは以外の何者でもない。随って特にこの問題について本格的に委曲を尽そうとなら、それこそ数十百頁を費さなくてはならないにも係らず、ここでそのような煩を避けることが許されるであろうためにわずかに先覚の思惟の一端を紹介するに止める事にしたい。

即ち故三木清氏はその構想力の論理（全集第八巻所収）の序に於いて、氏の思想的経歴を要約して見せている。今この要約を更にここで要約すれば、氏がその「歴史哲学」発表後において〝絶えず氏の脳裡を往来したのは、客観的なものと主観的なもの、合理的なものと非合理的なもの、知的なものと感情的なものをいかにして結合し得るか〟という問題であって、当時氏はこの問題をロゴスとパトスとの統一の問題として定式化し、すべての歴史的なものにおいてロゴス的要素とパトス的要素とを分析し、その弁証法的統一を論ずることが氏の主たる仕事であったというのだが、氏はこの仕事が余りにも形式的に過ぎることに不満を感じた結果、この統一は、具体的には何処に見出されるか、即ち単なる論理的構成にとどまらないその綜合は現実において何処に与えられているかを追究し、カントが構想力（Einbildungskraft）に悟性と感性を結合する機能を認めたことに想到して、ここに氏は始めて上述年来の問題の解決に近づき得るかも知れないことを予感しながら、氏の「研究ノート神話」を書きはじめたというのである。尤もその頃の氏はロゴスとパトスの綜合の能力として構想力が考えられたまでであって、一種の非合理主義乃至主観主義に転落する不安があり、この不安から氏を支えていたのは、神話につぐ技術とい

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

う客観的合理的なものがその一般的本質において主観的なものと客観的なものとの統一であるというに過ぎなかったと言う。ところが氏の考察が〝技術〟から〝制度〟に進む頃から、氏の考える構想力の論理が実は〝形の論理〟であることが明らかになり、構想力の論理という言わば主観的な表現は形の論理という、いわば客観的表現を見出すことによって一応の安定に達したというのである。以上は先述のように、三木氏がその構想力の論理の序文において、氏の思惟の経過の要約を語ったところを、私が更に要約してみたに過ぎないが、私がこのような二重の要約で満足しているのは、三木氏の構想力の論理における氏の〝仕事〟が形の論理を見出すことによって、ロゴス的要素とパトス的要素との弁証法的統合という次元で、或る安定点に届いた経過が、本稿に於ける主題「万葉葉の本質」ということと或る譬喩的関連を有つと信じたからに外ならない。

今私はことさらに譬喩的といってみたが、それは三木氏の構想力の論理を終始（といってもいいほどにいつも）支配するロゴスとパトスの弁証法的統一法を以て、私の主題「万葉葉の本質」を律しようとしていることではない。いやそれどころか私は逆に別の意味において、万葉集の本質とは或る論理に支配されつつもなおかつ論理から解放されていなくてはならないことを主張しているのである。

さて以上、本質とはと題して、五項目に亘ってその問題点を列挙してみたが、問題点はもちろんこれで尽きる筈もなく、もしこのような列挙を更に続けるなら、それは恐らく十何項目—何十項目と無限に数え立てられそうだけれども、そうすることが文学の本質論にとっては恐らく効果的ではあり得ないことを考えた私は、そのことを最後の第㈥項に採りあげることによって本章を打ち切り、第二章以下の本論にはいることとしたい。

㈥　（といってもその実㈤から派生的に考えられることでしか無いけれど）前述のように、三木氏に

随えば、氏の主題構想力を二つの対立要素即ちロゴスとパトスに分析し、この対立者を原始？弁証法的に統一することによって、構想力の本質そのものに分け入り、追究するのであるが、この場合パトスを支配する論理とは畢竟ロゴスの対立者として非論理的論理、論理でないもう一つの論理でなくてはならず、そしてこのような対立を氏の謂ゆる形の論理の導入によっていわば弁証法的に正反合の図式を辿るところに氏の構想力の論理が横たわるのであるが、私はこの辺から氏と惜しき袂を分ち、私の主題、特に万葉集の本質という本来の仕事にとりかからなくてはならないのであろう。

二　誦詠歌と読詠歌

誦詠歌に関しては、久米常民博士の名著「万葉集の誦詠歌」（昭和三十六年塙書房刊）を同博士の更に大著「万葉集の文学論的研究」（昭和四十六年、桜楓社刊）との関連において熟読しなくてはならないが、博士は前者において万葉集の誦詠歌が

(1)　文字の使用が考えられなくて、全く伝承によって伝えられた謂ゆる記紀歌謡などと同性質の歌
(2)　文字の使用は始まったが、その使用能力のない人々によって愛誦された地方的な民謡歌
(3)　文字の使用能力はあるが、その歌が公表され発表された時、肉声が用いられ、その記録が必ずしも原作者と一致していないような歌

という三点から調査出来る所以を指摘した上で、特に(3)に属する歌に対しては謂ゆる記載文芸としての詩文芸と非個性的な口誦文芸としての歌謡・民謡との対照乃至対決の問題としてとり挙げることが万葉集の理念と鑑賞の上に何等かの新しい意義をもたらすことを指摘され、このような最もすぐれた文字使用能力者であった万葉時代の貴族や官人たちが万葉集に遺した多数の歌が(1)・(2)と同じように、肉声で

誦詠されることを第一義として創作され鑑賞されたものであった事実を〝発見〟して居られるが、このことを私もまた本書中の卓見として江湖に推すに吝かでない。ただしかし、私がこうした卓説を踏まえて、しかも博士の誦詠歌論的立場から私の万葉の本質論的のそれへ移行しなければならないとすれば話はおのずから別でなくてはなるまい。

博士はこの発見によって、和歌文学がその発生当初に所有した口誦性を容易に放棄し得ないことの証拠だとし、それだけに、言語使用の芸術たる文学がその第一義を口誦性に置くことの根強さを示すものとせられつつも、博士は他方、本書九において、「誦詠歌からの脱皮」の一章を設けて、旅人・憶良・赤人の諸作品乃至一般贈答歌における間接伝達の方法を推測することによって「誦詠せられる歌から記載される歌への脱皮」を考えて行かれるのであるが、私はこのように、誦詠歌の根強さを強調しながら他方に読詠歌への脱皮を矛盾として指摘しようとしているのではない。なぜなら博士は本書において屢々巧妙に歴史性という新しい時間的契機を持ち込むことによってこの矛盾らしきものを解消し得ているからである。もっともこのことについては私は今これ以上に冗説する必要性はなさそうであるが（それは私の主題から遠ざかるであろうために）、ただその代りに私は、このような誦詠歌と読詠歌の間に隠見する、或る矛盾に似て非なる関係によって、私なりの「万葉本質論」をむしろ実証してみたい。例えば、万葉集の一代表歌人柿本人麻呂の作歌一首を実例として吾々はいかに万葉集の本質を受容すべきであるか。

周知のように、万葉集巻四には柿本朝臣人麻呂作歌と題する四首があって、その第一首は有名な

三熊野の浦の浜ゆふ百重なす心は思えどただに逢はぬかも　（四九六）

という歌であるが、この一首を、巻十一作者不明の任意の寄物陳思歌に比べてみるに、

A (1)遠山に霞たなびきいや遠に妹が目見ずとわれ恋ひにけり　(二四二六)
　(2)春日山雲居隠りて遠けども家は思はず君をしそ思ふ　(二四五四)
B (1)香具山に雲居たなびき欝しく相見し子らを後恋ひむかも　(二四四九)
　(2)雲間よりさ渡る月の欝しく相見し子らを見むよしもがも　(二四五〇)
C (1)沖つ藻を隠さふ波の五百重波千重しくしくに恋ひわたるかも　(二四三七)
　(2)ぬばたまの黒髪山の山草に小雨降りしきしくしく思ほゆ　(二四五六)

等の歌は、ABCの各々の(1)(2)間の相互に、着想なり用語なりの類句類想が見出され、そこに民謡的な集団的つながりを確認できるのに対して、人麻呂の「はまゆふ」の歌は、民謡的につながる何かを感ぜしめつつも、しかもそこには或る独自の人麻呂的個性があくまでも、民謡的共感からこれらの諸作を引き離していることを拒まずにはいられない。具体的に、「はまゆふ」を相聞歌へ取材することはただこの一例歌を求め得るに過ぎない点においてきびしく人麻呂的であり、且つその着想においても、他の相聞的着想から人麻呂を引き離してしまう。もっと言えば、上述の三種六聯の民謡的性格が、春日山香具山や乃至遠山に霞や雲がかかるように、或いは沖つ藻をかくす波や、黒髪山を濡らす小雨のようにせんさいな思いであるのに対立して、「はまゆふ」の歌で黒潮に洗われる「はまゆふ」の百重なす情熱がどんなにも人麻呂的個性を湧きたたせていることか。

三　呪的乃至宮廷的共感歌と対自然的個性歌

この関係は、前章における誦詠歌と読詠歌の関係から類推的にも追究し得るものらしいが、私は前章の実例人麻呂に対し、今度は彼に匹敵する赤人における、反歌をその長歌に関係つけることによって考

えてみたい。

赤人について、一、二の反歌的性格をしらべてみるに、前章人麻呂の「はまゆふ」の歌の諸関連において発見し得たような万葉の本質がもちろん別の意味で掘り起こされそうである。そこで実例一、二を示してみるに、まず本集巻三所収の望不尽山謌一首並短歌において、

田児の浦ゆうち出でて見れば真白にそ不尽の高嶺に雪は降りける　（巻三、三一八）

が、

天地（あめつち）の分れしゆ神さびて高く貴き云々　（巻三、三一七）

というその「長歌」に対する「反歌」であることは題詞の作者も認めているところであるが、だからといって、この反歌が一般に反歌についてよく言われるように、中国における「反辞」の例を受け、長歌の意を総括要約したもので必ずしもないことは、一方にこの長歌が、一首として当時の民俗的信仰の一面、即ち謂ゆる「山ぼめ」としての集団的たたえ事であるに対し、他方に反歌は不尽山に対する個人的自然感情を吐露したものであることによって明らかであろう。もっとも長反歌の関係におけるこのようなあり方は文学論的に言って何事であるか。それは反歌が長歌から脱皮して、之を否定し去ることではあり得ない。なぜならそのように反歌がその長歌を否定することは詩の長反歌組織の自己破壊でしかないからであろう。

同様のことは、赤人の吉野行幸供奉の際の長反歌の関係においても考えられることであろう。即ち長歌（巻六、九二三）における内容は吉野の宮の宮廷的自然美に媒介されてたたえ上げる大宮人の大君讃美という或る集団感情に外ならないのに対して、反歌二首（巻六、九二四・九二五）は象山のまにさわぐ朝鳥の声にせよ、夜更けの河原にしばなく千鳥の声にせよ、集団的な宮廷人から絶縁されようとする赤人個

人の寂静な詩境であって、その意味において赤人の自然は長歌と反歌二首によって集団的な長歌意識と孤独な赤人意識に二分されようとする方向を拒むことは一見出来なさそうであるのだが、しかも両者の間には、少なくとも文学論的に言った限りにおいて、宮廷的歌人と自然的詩人とを一人の人間として統一し得る何ものかが生きているのであって、それは万葉のいつ何処ででも生きているというよりは、却って極めて稀にしか生き得ないという意味においてのみ万葉の本質なのである。

四　和歌的抒情と詩的現実

日本の謂ゆる和歌がその成立以来殆ど例外なしに抒情的性格を護り続けて来たことはもはや常識的に理会される見解であろうが、こうした謂わば和歌的な理解の中にあって、現実（リアリティ）（現実主義（リアリズム）ではないところの）は詩のもっと広場にあるところの万葉集の本質でよくあり得たかについて触れて置きたい。

序章で一言したように、もし〝本質〟を数量的比率において考えたなら、それはここでわざわざ一章を立てて考えなくてはならないほどのたいした関心事ではないかも知れないが、もしそこに稀少な質的何物かが、宝石のようにまぶしく輝いているとしたら、それはやっぱり万葉集の本質に係る何物かでなくてはならないであろう。

万葉集巻三挽歌の部に「大津皇子磐余（いはれ）の池の坡（つつみ）にして涙を流して作りましし御歌」と題して

ももづたふ磐余の池に鳴く鴨を今日（けふ）のみ見てや雲がくりなむ　（四一六）

とあるが、大津皇子は懐風藻の小伝によれば、状貌魁格にして器宇峻遠、壮なるに及んで武を愛し多力にしてよく剣を撃つなどとあって、この挽歌はこのような所伝にも係らずあくまでも典型的な抒情歌として知られているのである。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com